

# 明日 への 話題

## 高齢化社会 運営の基軸



野村證券  
取締役会長

こが のぶゆき  
古賀 信行

日本の高齢化が急速に進んでいる。2010年の国勢調査によれば、65歳以上の高齢者の数は、2,900万人強、総人口の23%程度に達した。因みに、資本市場研究会が設立された1985年には、65歳以上の人数は1,250万人、割合は10%強に過ぎなかった。直近では、日本の中位数年齢（全日本人を年齢順に並べた真ん中の人の年齢）は、45歳に達したという。中位数年齢も、この四半世紀で10歳以上あがったことになる。

このような高齢化社会の進展に伴って、社会現象を見ると、隋所に変化が起こっている。一例を挙げよう。最近テレビを見ていると、20年も30年も前からアイドルだった人が、今もアイドルとして登場している場面に出くわすことが多い。視聴者の太宗を占める高齢層の支持を得る、これが番組の成否を決めるのだから、そうなるのは当然といわざるを得ない。成り行きに委ねるほかあるまい。

しかし、成り行き任せでは困ることがある。それは、国にせよ会社にせよ、凡そ「社会」をどう運営するかについてだ。高齢化社会とは、豊富な経験の持ち主が増えるということだ。豊富な経験に裏打ちされた、洗練された施策が提示され易くなる。一方で、経験に縛られ過ぎて、新たな事態に対応し切れないことも往々にして起こる。いくなれば、変化を苦手とする社会になり易い。これが高齢化社会の特性のようだ。

今は、高齢化の問題一つとっても未曾有の社会変革期だ。創意工夫を凝らす力をどう引き出すかが極めて重要だ。私は、社会運営の基軸に若い人材（所謂壮年）を据える、このことをもっと意識してやるべきだと思う。若さには未熟な面もある。だからこそ、その分懸命に努力する力も発揮される。それにも増して大切なことは、施策を自らやり切るといふ意思と責任感、実行していく時間を十分持っている、即ち未来にコミットできるということだ。高齢化が進む社会だけに、名実ともに「働き盛り」の人材に、社会運営の基軸として、社会のど真ん中で堂々と仕事をしてもらうことが大切だと思う。

嘗ては、「四十にして惑わず」、40歳は立派な壮年だった。今では、40歳は、年齢の上では日本全体の上半分にはすら入らない。順番待ちの気分で、働き盛りの年代を過ぎてしまいがちだ。これでは何も変わらない。現状維持のオンパレでは、もうもたない。